

今回の記念誌は、はじめ沿革を簡単にまとめたものというところであったが、それだけではもの足りないというので、その年の主な出来事に少し内容をもたせた小史ふうのものを作り、当時の学校内のごきや雰囲気を少しでも記録にのこしてみようと考えた。

そのなかで、生徒の活動も無視出来ないと思いい「部」や「クラブ」の活動の記録もできるだけ拾っておいた。文化系「部」、「クラブ」については特色ある活動や行事、体育系「部」、「クラブ」については各種大会の成績のうち地区代表権を得たものを中心にした。

## 昭和三十八年

—一九六三年—

### 修学旅行が難重なる

世はバカンス時代、空前のボーリングブームにわいた。一方「高度経済成長」政策がもたらした農業のゆがみが「三ちゃん農業」という言葉に象徴され、団地族の間に「カギツ子」が流行した。

五月一日(メーデー)が二時間授業(残りは終業式に)だったり、PTAの地区懇談会、団体地区予選にラクビーがあったり(本校当番校)、開校記念の生徒集会(十月二十五日)が行われたり、今昔の感がある。

この年の修学旅行は全く不運の連続であった。第一班の生徒が神戸港湾病院で盲腸の手術をうけるといふアクシデントがあった。この方は経過もよく付きそいをのこして帰途につくが、今度は連絡船が欠航し、帰朝時間が大幅におくれる始末。ところが、このあと第三班の小島幸一君が小豆島で急死するという衝撃的な出来ごとがあった(十一月六日)。小島君死亡の第一報が入った六日夜から学校側の対応が沈痛な思いのなかですすめられ、現地には西谷事務長、東京には高井先生を派遣するなど事後の処理に全力をあげた。小島君の遺体は八日現地で茶毘にふされ遺骨は十一日夜に、第三班は一日お

の採点も江南高校といっしょに行われた。この年はさらに学区制をめぐる協議がつづけられ、二回にわたって三校(湖陵・江南・北陽)による通学区改正に関する協議がおこなわれている。

職員協議会で教務主事選挙管理委員が選出されたり、職員会議の議長団の選挙がおこなわれ定員五名のところ同点者が三名いたので六名が議長団を構成することにし、Aグループ・Bグループに編成されたことなど今考ええると夢のようなことがまだおこなわれていた。但し、この年教頭の法制化が実現し、教務主事にかわって教頭職が法的にもうけられ任命されることとなった。さらに四十五年度からは複数教頭制(二人)になる。

この年も、生徒死去の悲しい出来事があった。当時三年生で山岳部長、生徒会総会副議長の鬼武亮二君が病に倒れ不帰の人となった。「湖陵」十号に「山岳部報にかえて」という後輩部員二人の追悼文が掲載されている。

この年から鶴居村中幌呂での夏の集団(学校)キャンプが始まった。この学校キャンプでは、生徒が夏休み中に個々にキャンプをおこなうのは学校の指導が行きとどかないということから、生徒会主催の学校キャンプを実施し、出来るだけこれに参加してもらおうようにしようということと、昭和三十六年から始まったものである。中幌呂で行われる前三年間は昆布森小学校を借りて行われていた。第一回目の昆布森でのキャンプのとき、大きな地震(震度4)にあり、びっくりして生徒を近くの神社がある山に避難させたという思い出を高井先生(現西高)が語ってくれた。

中幌呂のキャンプ場は当時鶴居村会議長の西野さんのご好意で借りることになったもので、のちにこのキャンプ場の建物(ブロック工場と従業員宿舎跡)がPTAの手で買いとられ、「湖陵高校キャンプ場」の看板が建つことになった。また、四十六年から行われるようになった宿泊研修も三年間はここでテントを張って実施された。

中幌呂での第一回のキャンプは、行事内容も盛り沢山で、参加者も年々増加の一途をたどった。ちなみにこの年のキャンプには生徒一六四名が参加し中幌呂ブロック工場跡、中幌呂中学校での四日間、器楽部の市内パレード、中幌呂小・中学生を対象に演奏会を催したり、村役場、④大洋従業員との交歓野球大会、郵便局員の人たちとバレーの試合をしたり、その他芸能大会、料理コンクール、ファイヤーストーム、黒ん坊大会などが行われた。

かれて悲しみの掃蕩をした。全校しばらくは悲しい空気につつまれた。

原因は何であろうと、生徒が学業半ばで亡くなることほど心の痛むことはない。それも、高校生活のなかで一番思い出にのこる最大の行事修学旅行先で生徒を失うとは、とりわけ担任の悲しみはいかばかりであったろうか。いま考えるだけでも胸のつまる思いである。小島君の告別式は十六日、法華寺でとり行われ、全校あげて小島君の冥福を祈った。

また、年もおしつまった十二月三十日、釧中第一回卒業生、梅楓塾鉄舟道場塾頭で長く湖陵同窓会長であった、中川久平氏が逝去。終生湖陵と湖陵生を愛する心情を吐露した氏の弁説は多くの人々に感銘を与えた。翌三十九年には氏の胸像が校庭の一隅に建立され、日夜湖陵を見守っている。三十九年二月発行の「コリョウ」(十四号)は、中川先生をしのぶ特集をくみ、学校長(中野一雄先生)をはじめ、後援会長(刀禰房吉氏)、本校教諭太田常喜先生、金子享氏、丹葉節郎氏、同窓会幹事長・米内富久司氏の寄稿がのせられ生徒の座談会も集録されている。

また、この「コリョウ」では、「湖陵」を考えると「うも」ひとつの特集をくみ、「変態的な空気が学校内に流れている」として、喫煙問題や、服装規定違反の問題、湖陵は「自由」すぎるのではないか、新しい伝統とは何か、学校側の遅刻防止対策(玄関閉鎖)への批判などの投稿がけいさいされている。これは、この年一生徒が朝の服装検査時に教師との間にトラブルをおこし、そのことが地元新聞で報道されたりして、校内での生徒指導をめぐるや緊張したひと幕があったことを反映したものである。

## 昭和三十九年

—一九六四年—

### 中幌呂キャンプ始まる

三月に行われた入学者選抜は、小学区制のもとでの二校(湖陵・江南)による総合選抜であった。江南高校との間で通学区の調整がおこなわれ、入試

東京オリンピックの年、「ウルトラC」おれについてこい」などの流行語が生まれた。東海道新幹線も開通、交通新時代開幕。世はマイカー時代へ。

## 昭和四十年

—一九六五年—

### 最後の「兎狩り」

オリンピック景気が終り、「四〇年不況」へ。ベ平連(ベトナムに平和をノ市民連合)など耳なれない名称に関心あつまる。  
「おぼO」が爆発的人気呼び「おそ松君」の「シェー」が流行。

釧中、湖陵伝統行事のひとつである「兎狩り」が一月三十日、新狩猟場に選定された鶴居村でおこなわれた。当日の学校日誌によると、「午前六時の気温マイナス十七度、風無く、十時頃より気温上昇し快晴、初めての猟場の事として、輸送・包囲陣形・一斉行動開始等々に手違いがあったが、兎狩り遠征としては快適の一日。獲物一羽」とある。鶴居鳴動、うさぎ一羽」といったところ。

この兎狩りは、諸般の事情から四十年度は中止、四十一年度も職員の方針が多く見送られ以後実施されなくなる。同窓会の先輩の話によると、兎狩りは開校当初から行われていたらしく、大正十二年までは、武佐(今の武佐小学校のあたりか)が狩猟場であったが、翌年から大柴毛にかわったということである。最後となったこの年の兎狩りも、二、三年ぶりのものだった。

四十年度の入学者選抜は、三校(湖陵・江南・北陽高校)による総合選抜制でおこなわれた。長い間釧路市民の間でも論議されて来た高校通学区もこれで落ち着くかに見えた。当時は市教委も「向う五年ぐらいは現行のまま実施、将来の通学区のあり方を慎重に検討したい」と明言していた。少くともこの時点では学区制拡大のうごきは見られなかった。ところが、三月の入試が終って間もない五月十五日、道教委は突然高校通学区を小学区制から全道八学区の大学区制に拡張することを公表した。これは、普通科、職業科の比率を50対50にするという普通科大幅削減の「高校の再編成計画」の具体化のひとつであった。これをきっかけに教育界のみならず、全道民の大きな関心事となり、高校教育をめぐる議論が噴出するなかで四十一年度から強行されることになった。

尚、この学区制については、大学区制のもとでの高校間格差、遠距離通学生や下宿生の増加、市部から郡部への生徒の逆流などの問題を生じ、道教委

は中振協（中等教育振興協議会）の提起にもとづいて、学区の一部手直しをおこない、二十一学区（中学区制）にすることを決定。これが四十八年度から実施されることになる。

しかし、高校教育をめぐる議論は依然おとろえず、道教委は四十九年六月校長会、連合PTA、市町村教委、教育学者の他、はじめて北教組、高教組代表をも委員とする「入選協」（公立高校入試選抜改善研究協議会）を発足させ、北海道の高校入試制度のための検討がはじまった。二年九月月に及ぶ検討の結果「入選協」では、五十二年三月「最終報告」を道教委に提出した。それは、高校間の総合選抜制、学区の縮小を打ち出し、選抜制度の改善の方向を明示した画期的なものであった。これをうけた道教委は、庁内に「公立高校入試選抜改善研究会」（入選研）を設け試案づくりのための検討に入った。五十三年三月「公立高校の入試選抜に関する改善試案について」という教育庁「試案」が公表された。これによると学区制については、「公立高校普通科の学区を現行の二十一学区から三十八学区に細分化し、そのうち都市部を中心に十八学区で総合選抜制を実施する」とし、「入選協」報告の積極的な内容を一定程度うけつこうとしている点が注目された。しかし、これさえも、今だに実施されず、その他の問題とともに依然として高校教育にかかわる課題となっている。

この年、釧路にも工業高等専門学校が開校。中学校にとっては高校とは違った進学先がふえたことになり、高専と湖陵かけもちの受験生がふえていく。オリンピックの翌年とあって校内でもオリンピック映画の団体観賞が二回にわたっておこなわれたりオリンピックムードの余韻がつづいた。

第二回中幌呂学校キャンプでは二百名という多勢の参加があり、事故なく平穩のうちに終わったものの、このように規模が大きくなって来ると、団体行動のむずかしさを感じられ、問題がある」と生徒会執行部の反省がみられた（「湖陵」）。しかし、学校キャンプの参加者は年とともに増加し、四十一年四十二年は三百人、四十四年にいたっては四八三名、四十五年三八四名となっている。

震度4の地震におどろいたり（十月）、年の瀬もおしつまった十二月二十三日夜、三年生の石前堅市君の雄別線での事故死があったことが知らされ、終業式を翌日にひかえて、落ちつかない悲しい年の暮れとなった。石前君の死

楽しいものだった。

学校祭を前にして「最近生徒の綱紀弛緩の傾向あり。遅刻多数、空き時間、昼食時、無断外出して食堂に入りし、服装不整備等文化祭接近と併せ漸増の傾向、嚴重注意のこと」と学校日誌には記さされている。この時期になると、多かれ少なかれ今も変らぬ「祭り」前の様子だ。この年の学校祭では、阿部与氏の講演がおこなわれた。阿部氏は、釧路中学校第二代校長阿部与作先生の御子息で当時北海道大学工学部部長のち室蘭工業大学学長にもなられた。夏休み中の八月十三日、学校正門前の民家の炭小屋が燃えたり、九月には第二屋体（記念館？）近くの古材（解体材料）が放火されて炎上、小火にとどまったが、外来者が子供のいたずららしいと言われた。年があけて一月二十日夜九時頃、グラウンドコート側の物置小屋（庭球、バレー及び道具入）内部が全焼するというさわぎがあり、昨年の「学大」の火災のこともあり、火事には苦がい経験をもっているだけに神経をとがらせた。

組合による一〇・二二一斉休闘争を前に、十月のはじめ勤務時間策定の提起がなされ、一〇・二二の一週間前全教職員の完全な合意は得られないまま勤務時間が明示された。（平日・八時二〇分～一六時五五分、土曜・八時二〇分～一三時一〇分）。一〇・二二一当日本校はちょうど修学旅行第二班出発の日であった。

四月には斉藤礼子さん（当時二A）が亡くなった。再起不能の奇病にかかり、病床にあつて死の直前まで書き続けた詩は、のちに、ユーカーリ詩話会から発行された追悼号に収められた。また、放送局（VOK）では、斉藤さんのおいたち、人柄などを取材して録音構成「礼子の鍵」を制作。これがこの年の第十四回東北・北海道高校ラジオ作品コンクール兼第十回全国高校ラジオ作品コンクールの道予選で見事最優秀賞を獲得して話題となった。

私は何かを考えねばならぬ

何かを考えて

悲しまねばならぬ

この遠い空のはてに

私の考えを浮かべねばならぬ

浮かべた考えを

に對して、友人一同が「湿原」と題する文集を發行し、さらに「湖陵」でも友人二人の追悼文をのせている。追悼文は「私たちは、彼の死によって何を待たか」として次のようにのべている。

「――私達が入試をめざして努力しているときに、自己の人生を生死をかけて戦いをして一人の男を、そしてその心の中を教育者である先生方や親しい友人でさえ知らなかったことを決して忘れないでほしい。高校は予備校じゃない、又学問ばかりの場でもない。最も大切なのは、どんな苦境にあつても明日を切り開けるだけの心の糧を得る所であり、又支えてやるべき所なのだ」と――あらためて、教育の場から失われた一人の若い生命にかかわる深刻な心の葛藤にまで思いをいたすことができなかつたことを悔いる想いである。

五月二十八日夜、学大（釧教大）で火災があり、学校火災の恐ろしさを目のあたりにした。この学大火災に對して校内でも見舞金がつられ、一三、四三〇円の善意が寄せられた。

### 昭和四十一年

――一九六六年――

### 大学区制スタート

大学区制のもとでの最初の入学者選抜がおこなわれた。ちなみにこの年の受験者は五〇四名（男子三三六名、女子一六八名）であった。入学式の翌日行われた対面式（九日）の席上、校旗が贈呈された。それまで校旗がないのに驚いた同窓会の先輩諸兄が、母校と後輩のためにと校旗を発注し、四月五日巖島神社で入魂式をおこない、この日の贈呈となった。贈呈式には三原会長代理、岡野幹事長が出席した。

生徒会主催の中幌呂での学校キャンプは第三回目となるが、キャンプ場の建物がP・T・Aの手で買いとられ学校専用のキャンプ場となった。参加者は三〇〇名。雨にたたられながらも、夏休みが「四日間て全部終わった様な」

散りばめねばならぬ

この悲しみを

散りばめねばならぬ

（「礼子の鍵」の中で朗読されたもの）

### 昭和四十二年

――一九六七年――

### 「文」「理」の類型始まる

この年はカリキュラムの改正に関して議論がたかかわされた年であった。提起された問題は二件で、ひとつは、家庭一般四単位の必修と、いまひとつは、週三十四時間制と類型の設定であった。家庭一般四単位必修の問題は家庭科からの提案で前年度からの継続審議となっていたもので、「家庭一般四単位を必修とし、一年時においては男子に体育を、二年時においては男子に芸術または商業のいずれか一方を選択履修させる」というのがカリキュラム委員会の原案であった。これに對して、家庭科の四単位必修（一年時2、二年時2）には反対がなかったが、二年時の裏単位2に関して、「二年時も芸術を全員履修とし、現在実施している数学、物理の増単各1、合計2単位をなくし、それにかわって女子には家庭一般、男子には芸術か商業の何れかを選択させる」という対案が出され議論になったが、結局学校長の採択ということでカリキュラム委員会案どおり決定した。

いまひとつの、週三十四時間による下揃え、類型の設定については、年度当初学校長から「週三十四時間と、増単する科目の検討を」という諮問をうけたカリキュラム委員会が、二十四時間と同時に類型についても検討したもので、「従前の五コース制の反省もあり、また大学区制による能力差の縮小、地域社会の要望、生徒の希望を勘案」して「進路にのみ焦点を合わせてコースを細分化することは本校においては妥当ではなく、むしろ文科系への適性をもつものと理科系への適性をもつものと大きく二つに分類し、その適性にふき

新年早々、米価をはじめ公共料金の値上げラッシュ、物価戦争、という新語流行。一方では、カー・クラー、カラーテレビの三Cが新三種の神器となった。早大で全学共闘会議の闘争激化。

美濃部東京都知事誕生。「都民との対話」から「対話」が流行語となる。紀元節の二月二十一日が「建国記念の日」となる。  
ヒッピー族出現。「全学連」三派の街頭闘争展開。

わしい科目の増単」というもので、①のコース（文科系）、②のコース（理科系）として提起された。

この問題の論議のなかで、カリキュラム委員会が反対の意見をのべた委員に対し教頭が職員会議での発言を禁止するという前代未聞の乱暴なことが公然とおこなわれたことは今も語り草となっている。これに対するつよい抗議の発言も出たが、結局は校長の裁決によって原案どおり四十三年度から三十四時間制、文系、理系二つの類型がとられることになり、以後四十七年度まで続くことになる。

また、この年能研テストが本校でも実施されたが、この能研テストは翌年を最後に姿を消し、四十四年一月には能力開発研究所ついに閉鎖される。超勤問題がからんだ宿日直制度廃止のうごきがたかまるなかで、道教委は業者（東京美装）と契約を結び、警備員（ガードマン）制度が発足。夜九時から翌朝八時半までの間学校の警備にあたることになったのはこの年の九月一日からであった。ただし宿直制度はまだ続いた。

この年も、一年生鈴木実君の事故死があり心を痛めた。（十一月）

## 昭和四十三年

一九六八年

### 「理数科」で議論

三C時代本番。イザナギ景気、はじめまる。昭和元祿、とも。日本初の心臓手術が話題となる。三億円事件、参院選でタレント候補当選。「ゲバ棒」「ノンポリ」など、しきりに登場。メキシコ五輪の年。

二月の職員会議で、これまでの二期制を三期制にあらためることが検討され、「年度途中の評価並びに出欠状況を早目に知ることが出来」「学習指導にも適切である」ということで、四十三年度から三期制を採用することになった。また、時制も一部手直しされ（八月、午後一時十五分に五時限の子鈴をならす。朝の職員の手合せを五分短縮し時間内に打合せを終了させるために、生徒の異装、クラブ遠征等のことについては黒板に掲示する。連絡事項は原則として一括プリントにし、口頭は緊急のものに限るということにした。これが今の「湖陵だより」のはじまりであるが、はじめの頃は「日報」であった。

また、更に翌々年の三月になるが、「制帽の自由化」が承認された。これは、「登下校時制帽、制服の着用は原則であるが、制帽の着用は自由とする。但し制帽以外の帽子は認めない」というものである。この問題を討議しているなかで、「同窓会の意見も聞いてみる必要があるのではないか？」という意見が出た。さすが伝統というか、歴史が古い学校ならではの感を深くする。

次に、大きな話題となったのは、「理数科」設置の問題である。この問題については、五十四年度の「研究紀要（第二号）」に、「湖陵高校理数科10周年を考える」という特集がくまれ、そのなかで、理数科設置の経緯を語る座談会や、理数科設置をめぐる三回の職会議のよう（質疑応答）が抄録されている。

理数科のことがはじめて校内で提起されたのは、この年の十一月八日の職員会議で、このときは、道教委の「高等学校理数科の設置状況」という文書が配布された職員会議まで各自、各教科での検討が要請された。このあと十一月十五日、十九日と二回にわたる職員会議で、まず各教科の見解が発表され、そのあと、本質論か現実論かではげしいやりとりの一幕もあり、討議は必ずしもかみ合わず、全体としては現実論が大勢を占めた。

翌年二月には、理数科の具体的なうけ入れ体制として、カリキュラムが検討され、普通科との下揃えの問題（普通科三十四、理数三十六）をはじめ、いくつかの問題点が指摘されたが、論議はつくされなまま、また大きな問題の割にはたった三回の職会議で議論しただけで時間切れ質問打ち切りとなり、これ又結局校長の責任において委員会原案どおり実施することになった。こうして本校でも四十四年度から理数科が設置されることになった。道内では、四十三年度の函館東高校（市立）、旭川西高校、札幌啓成高校の三校について、湖陵高校、北見柏葉高校、室蘭栄高校、滝川高校に理数科が設置された。

「だより」になったのは四十八年からである。

この年の学校祭では、釧路室内楽団の出演があり、また北海道新聞論説委員の山下忠雄氏の講演がおこなわれた。演題は「世界は変ぼうする」であった。学校祭で外部講師による講演がおこなわれたのは、三十八年以降では、四十一年の阿部与氏、四十二年の山口哲夫氏（当時釧路市長）、田中彰氏（北大文学部助教授）——「明治百年と明治維新」——、四十四年の中川正男氏（北海道新聞釧路支社）——「当面の時事問題」——で、それ以後はおこなわれなくなった。

この年は後半に入ってから生徒の規律指導、理数科設置に関して議論が湧いた。とくに生徒の規律問題の論議は翌年五月までつづき、八月二十一日の演劇部「公開部会」に端を発したいわゆる「学園紛争」にもかかわる要素をはらんでいたことは残念乍ら誰も予測しなかったのではないだろうか。規律指導の問題は「無帽、遅刻、無断外出が目立ち指導に手ぬかりがあるのでないか」、「とくに制帽廃止のうごきがあることを考え、この際制帽の必要性を明確にうち出し、違反者には断乎たる態度を」という意見が出され、教員の統一見解を出そうということで、指導課の統一見解をめぐって討議がかきねられた。討議のなかで、校則の変更改正（制帽の廃止など）が生徒会の代議会で討議することが認められるかどうか焦点となり、校則については「HR討議——指導課の検討——職会」というルールを守り、代議会で話し合いをさせるかどうかは「必要があれば決める」とする指導課案をめぐって議論が伯仲した。なかには「代議会で議決出来ないことを確認してあれば審議させてもかまわない」（曾抜き）とか、「代議会に意見を徴することがあるという部分を撤回せよ」というような強硬な意見も出るなど、足かけ二年、五回も職員会議がもたれたものの、結局「校長自身の判断で処理したい」として「指導課原案を統一見解として指導してもらおう」ということで幕がおろされたが、釈然としないものがこった。翌年の「学園紛争」のあと（四十四年十二月）この問題が生徒会の方から再びもち出されるが、このときは結局「ルールを守って代議会で討議させる」ことが圧倒的多数の賛成で承認された。ルールとは、「校則問題、生徒の日常生活問題等については、議題をHR討議にかけて代議会で討議し、代議員の過半数で決定されたものは要請として生徒会顧問を通じて職会に提出し、職会で検討し決定する」というものであった。

## 昭和四十四年

一九六九年

### 「学園紛争」湖陵にも

「理数科」スタート。（クラスはA組）

校則が代議会で討議出来るかどうかをめぐる論議が再びはじまったが結局は前記のように「校長自身の判断で処理する」として、代議会での討議は認めないことで、その場は打ち切れ、校則に関する代議会での話し合いを封じ込めてしまった。さらに、この間、卒業式の答辞（生徒会長）が指導教官の手をはなれて、教頭によって書きかえさせられるということもあった。

各地でおこった学園紛争は大人たちが作り出した社会情勢、政治情勢に対する若者たちの屈折した抵抗の姿であったが、湖陵では、このようなことが「学園紛争」の下地になっていったと見ることは出来ないだろうか。それは湖陵の「学園紛争」のさ中、指導課が「調査委員会（後出）」の資料にもとづく問題点の整理」をするが、そのなかで「事件（八・二二）以前の諸問題」のひとつとして、「生徒の自主性をどの程度尊重するか、制帽問題、代議会のあり方」をはっきり指摘していることから分かる。そして、これもすでに前記したとおり、「学園紛争」が次第に鎮静化に向うなか（翌年三月）で「制帽の自由化」を承認する。

「学園紛争」——それは湖陵にとっても決して対岸の火事ではあり得なかった。八月二十一日——前日、二学期の始業式を終えたばかり——午後六時半突然の電話で全教員に緊急召集がかかり（連絡不十分のため登校出来なかった七名を除き）、職員会議がもたれた。この日の放課後校内でひらかれた演劇部の公開部会での出来事が報告され、その中で中心的な役割を果たした三人の生徒に対する指導について問われたのである。緊迫した空気の中で職員会議は午後一〇時に及び、該当生徒の担任のなかには翌朝二時までその対応に追われた先生もいた。これが「八・二二」事件といわれ、湖陵の学園紛争のはじまりであった。

人類ついに月に立つ。全中共闘、赤軍派登場、大学紛争が続く、断絶の時代」といわれた。黒ネコのタンゴが大ヒット。

演劇部の公開部会(紛争のなかで公開)ということばがよく使われた。公開討論会、公開質問、自主討論会などで一体何がおこったか。二十一日の放課後、三年C組の教室で演劇部の公開部会がひらかれた。これには演劇部員以外の者も同席し総勢四〇名ぐらい参加した。このなかで三名の生徒(一人だけ演劇部員で他の二人は部員外)が、二人の顧問(永田・吉川教諭)に対し部の運営と、顧問の演劇観をとりあげ、つよく自己批判を要求した。(夏休み中から、顧問の指導に従わない一部部員と顧問との間に対立がみられるようになり、顧問としては他の部員と連けいを求めて部のまとまりを維持しようとした。このことが第二演劇部をつくる策動をしたと指弾されることになる。また、顧問の演劇観に対して芸術至上主義であるという批判があった)両顧問は直ちに自己批判に応ずる考えはなく、むしろ自分の演劇に対する考え、高文連の発表会を前にして一日も早くそれにとりくみたい考えであること強く主張したため、あくまで自己批判を求める三人との間の対立は次第にふかまり緊張した空気になっていた。教室の状態も机(二・三ヶ)で入口をふさぐようにして、ことばもはげしいものになり、時間も経過して下校時刻(五時半)が迫った。下校を促す校内放送も入ったがいつに終る気配がなく、定時制の授業も間もなく始まる時刻なので、職員室にのこっていた教頭以下数人の先生たちが、事の異常さに気付いて教室(二階)の方に向かった。そこで下校を促すと、これを列をなして阻み、からだを接しよくさせながら、「この野郎、馬鹿、てめえ」といった暴言を吐く者も出る状態であった。

この騒ぎのなかで、とくに中心的な役割を果たした三人の生徒に対する指導をどうするか、今までにない集団を背景にしたはげしいトラブルだっただけに事は急を要するということから、夜の緊急職員会議の召集となった。会議は、その対策をめぐって延々三時間をこえる深夜に及ぶものとなった。このときの結論は、ともかく翌日生徒同伴で父兄を召喚し、本人と父兄から事情をきく、ということを決めて終った。このあと三人の生徒の担任の他何人かでそれぞれの家庭に電話で連絡し、翌日の来校を要請した。

翌日(二十二日)該当生徒三人と父母が来校し会議室で教頭を交えて担任との話し合いに入った。ところが、冒頭にみせた教頭のきわめて威圧的な態度に刺激されてか、中には生徒と同じようにはげしく顧問を批判する父母もいた。この騒ぎのなかで、とくに中心的な役割を果たした三人の生徒に対する指導をどうするか、今までにない集団を背景にしたはげしいトラブルだっただけに事は急を要するということから、夜の緊急職員会議の召集となった。会議は、その対策をめぐって延々三時間をこえる深夜に及ぶものとなった。このときの結論は、ともかく翌日生徒同伴で父兄を召喚し、本人と父兄から事情をきく、ということを決めて終った。このあと三人の生徒の担任の他何人かでそれぞれの家庭に電話で連絡し、翌日の来校を要請した。

ところが、この調査委員会に対する生徒の反応は、かなり手きびしい批判であった。それは、果たして「正確な資料ができるか」という不安から、「統一見解を出すのか」「全員に配布するのか」「意図・目的は何か」と言った調査委員会の性格や調査結果の扱い、そして何よりも重大な批判は、「何故生徒を加えないのか」「生徒集会開催が先決」というものであった。さらに、調査委員会の設置を決めた翌日、三年生のあるクラスでは、クラス討論の結果として「公開質問状」を出した。そのなかでも、「全校集会(事態解決のため)の開催要求」をあげ、さらに現在の「顧問は何を意味するか」「職員会議の実態」「父兄呼び出しに対する疑問から」「父兄呼び出しの根拠」「社研・新聞局等のビラ配布停止根拠」の他に、「調査委員会の構成人員及びその性格」を明らかにするよう要求した。

また、翌年の三月に発行された機関誌「湖陵」一〇周年記念特集号の内容は四十四年度のものになるわけであるが、当然のことながらこの「学園紛争」にゆれた学内のファン囲気を反映したものになっている。とくに特集のテーマとなっている「教師と生徒の関係」「私の高校時代」「生徒会自治」などは、あきらかに、当時のゆれうごいた学内の状況の中から生まれたものであり、この中に、調査委員会を痛烈に批判した生徒の一文がある。次のように言っている。「後で親戚の労働者の人に聞くと調査委員会というのは労働者がストをおこすとそれの引き伸ばしや、攪乱のために会社側が持ちこたえる(原文のママ)手だそうです。これを見ると生徒のなかには、とくに紛争の中心的役割を果たした生徒たちにとっては、調査委員会へのキモン、不信は予想以上に強いものであったことがあらためて知らされた思いである。

事実、調査活動に入ると、演劇部は部として不提出を決め、中心人物の所属する三年生のあるクラスでは全員一致で調査を拒否し、一年生にもこれを働きかけたり、逆に生徒集会の開催を要求した。このような調査委員会に対する生徒の批判に対して調査委員会は、「現状では生徒の参加はむずかしい。しかし秘密は守ること、処分を前提にしたものではないことを明確にし、あくまでも事実と全体の流れを明らかにするため、公平な調査をする」という姿勢で、ともかく調査活動に入った。

調査用紙の集約状況は、予想どおり良い結果ではなかった。集約されたのは配布数の半分に満たない二十二枚(うち生徒の分は十六枚)、そのなかで

いたため、二人の顧問にも出席してもらった。そこへ他の演劇部員も合流し、両顧問を詰問する状況となっていた。さらにそこへ新聞部の生徒も取材と称して入室、話し合いは混乱した。このため、父兄は校長室にうつり校長と話し合うことになったが、ここでも父母から顧問に対する不信のべられた。これに対して、学校側としては、顧問のみならず他の教師の指導にも従わず、しかも大きくたえない暴言をほくに至っては、指導の限界をこえている、今後どうするか考えてほしいと要請し、ひきとってもらった。

翌二十三日(土)には釧路新聞社、二十四日(日)にはタイムスの取材があり、管理職がこれに応じた。これが、あとで生徒の方からは一方的に商業新聞の取材に感じ、問題を一演劇部だけの問題に矮小化している。事実とちがう報道をした」とつよく指摘・抗議されることになる。

このような騒然たるなかで二十五日の職会で本格的に事実を調査し早急に生徒に対して真相を伝える必要があるということ、委員会の設けることが指導課から提案され、調査のための委員会(調査委員会)を設けることになった。一方、この時点での各クラス・クラブの動きは「意見発表会(生徒と教師)」「全体集会」「生徒総会」の開催を求める要望が強く出ていることが報告された。また、この間も三人の生徒は登校していたが、三人が「学校から自主退学をすすめられている」と噂するものがあるということも報告され、三人の生徒の措置も関連してきて事態は良くない方向にうごいていることが感じられた。

職会で決まった調査委員会は、演劇部の顧問を除き、各学年から一名、フリーから四名、計七名で構成されることになり早速入選に入った。このことは翌朝全校生徒に発表された。一方新聞部でも調査をはじめた。この時点では三人の処置については、今後事実が明確になってからあらためて考えるということであった。

調査委員会では早速調査活動に入ることにになり、八・二一の演劇部公開部会に同席した四十八名の生徒の他、教師(全・定)に当日の状況について情報の提供・協力を求めて、次のような調査用紙を配布した。「八月二十一日(木)放課後の演劇部の公開部会に参加して、あなたがそこで見聞したり、発言、又は行動したことについて、くわしくのべて下さい。できるだけ時間をおって整理して下さい。記憶の不明な部分については、その旨を記して下さい。」

当日の状況をのべたもの七、疑問・要求・感想をのべたもの一四、抗議という内容で依然として調査委員会に対する根強い不信、このような学校側の対応に対する不満があることを証明していた。

調査委員会ではこのあと未提出者十五名と面接し、提出しない理由を質すことになるが、そのなかで「生徒の代表が参加していない」「三人に対して自主退学をすすめている」「全校集会をひらいて事実を知らせるべきだ」「生徒会総務委員会が全校集会をひらくことを決めた」などが理由であることがわかった。このような状況のなかで調査委員会は、ともかく調査に応じた十六名の生徒、五名の先生の記述から、当日のようを組み立てた報告書を作成することにしたが、その他何らかのかたちで集会をひらくことが事態の収拾に役立つと考え、三十日の職員会議に「情況報告会」の開催を提案した。

すでに、八・二一以来、一週間以上たっていたが、三人の生徒の影響は次第に大きくなっていき、幸い授業中にまでさわぎを持ち込むことはなかったが、授業時間以外でのうごきは次第に活発になっていった。教員を名指しで攻撃したり、顧問制、検閲批判の所属不明のビラがしばしば配布されたり、全校集会要求のクラスの決議文、校門の入り口に立っている学校の看板や、校舎の一部(ガラスや壁などに)に赤いペンキで落書きをしたり、演劇部は完全に顧問を無視し顧問が自己批判しない限り文化祭の発表はしない、など目前にした学校祭にも影響するうごきになって来た。この年の学校祭のテーマは「主張しよう」小さな声を大きな叫びに」であった。HR展示の中に「安保と高校生」という政治的関心を示すものがあったり、学校祭期間中一日二回、生徒会主催の討論会がひらかれたりした。

三十日の職会では、調査委員会が提案した集会について、集会の主体はどこか、規律は守られるのか、大衆団交にならないか、等の不安ものべられたが、結局は全校集会をひらくことには全員が賛成した。ただ、集会をひらくにあたっては、事前の十分な準備が必要だということから、生徒会顧問が生徒会執行部とそのことで接しようすることになった。

この段階で、調査委員会としては、調査活動がおくれていること、資料が必ずしも充分でないこと、生徒会が集会の準備中ということなどから中間報告は時期尚早という考えであったが、全体としては、中間報告をすべきだということになった。いま考えると、このように殆どの生徒がのぞんでいた

と思われる全校集会を生徒会と学校が一体となってひらく方向にふみきったことが、「学園紛争」を取捨にむかわせるための大きな分岐点になったものと思う。但し、そこではどうしても秩序ある集会運営のなかで、生徒・教師それぞれの意見が卒直にのべられることを保障することが肝要であった。当時の生徒会がそのことに關して実に誠実にとりくみこの集会のもち方について細かい点まで配慮した努力は高く評価されるべきであろう。

生徒会顧問と生徒会執行部との間でおこなわれた接し方の結果、「生徒集會、生徒会総務委員会案」が出され、殆んどこの案にもとづいて集會がもたれることになった。骨子は、(目的)二十一日の事実を知る、(期日)学校祭前(内容)演劇部顧問二名(持ち時間、二〇分)、部員二名(持ち時間、二〇分)同席者三名(持ち時間、一五分)とし、当日の状況、意見を發表してもらい、質疑応答はするが討論はしない(司會)三人(会長、総務會議長の他に一人)混乱した場合は司會が中止する。みかねる場合は教師より連絡する。というものであったが、会場図までそえ、マイクの使用などにも配慮したきめの細かい計画であった。さらにこれらの集會のルールを徹底させるため集會の前日(三日)各クラスの議長を召集し、集會当日のロングホームルームでこれをしていくという念の入れようであった。

こうして、生徒集會は九月四日の五・六校時を使って開催されることになったがこれにあわせて、調査委員会の中間報告をプリントにし生徒全員に当日の朝のロングホームルームで配布することにし、質問があれば担任が持ちかえることにした。

全校集會は緊迫した空気をはらみながらも心配された程の混乱もなく予定どおり進められた。まず見解の發表に立った演劇部の顧問は、緊張した面もちながも自らの見解を聴することなく披露し、八・二一の情況についても、それは決して正常なものではなかったことをはっきり指摘する一方、「第二演劇部云々」の点については、誤解をうける部分があったことを卒直に認めた。生徒の方は、二人の女子の演劇部員が演壇にたち、はげしい演劇部批判を声高におこなった。今では、生徒が何を言ったか具体的には思い出せないが、何しろ甲高い声だったことがよく印象に残っている、と永田先生は語っている。(集會では記録もとられた筈である)

この集會のあともお、自主討論會がひらかれたり、もういちど集會をも(ピール)は出さないことを約束するという態度の変化もみられた。また、社研が指導課との話し合いを求めて来たり、依然として無届ビラが配布されたりしたが、むしろ校外での行動が耳に入ってきた。ひとつは、九月の釧根地区高文連演劇発表大会に、部としてはついに参加できなかったが、この大会の表彰式(公民館)で、本校の演劇部員が「賞状を破れ」などと叫び一時式が混乱におちいったり、また、十月の高文連釧根地区新聞大会では、編集技術の講演のため大会に招かれた釧路新聞社の講師に対して、講演(学校新聞の講評)の途中で、釧路新聞が八・二一について報道したことに対して、その見解を質す」という緊急動議が出され、講演はそこで流れてしまった、というようなことが起った。

このように、校内では事態がまだくすぶりを残しながらも徐々に平穏にむかうなかで、前記のように代議会で校則を討議することを認めるのであるがこれに対して、代議會に出席した一部の生徒(八・二一で中心的に動いた者を含む)が、「代議會は代議會、職會は職會とはっきり別のものであり、対等のものである」という意見をのべ、監査委員が校則の討議を代議會で可能であるとした道をふさいでしまうようなこともおこっている。

ひきつづき、学内で大きな話題となった問題に、「卒業式の改善」がある。これは、三年学年會が最初に問題を提起したところを見ると、「学園紛争」の余波と見ていいのではないだろうか。但しこれについては、職員の間にも改善の声がなかったわけではない。また、二年学年會からも、教務を中心に卒業式のあり方を検討する委員会をつくってほしいという要望が出され、「卒業式運営委員会」が設けられることになった。実はこれに対しても生徒の方からは生徒を入れないことについて批判が出た。

「運営委員会」が生徒会からの要請をうけいれてつくった案、さきに提示された三年学年會の案をうけとめ、卒業式の改善が実現する。その主な点は、卒業証書を総代がうけとるのをやめ、クラス代表が各HRごとに受ける、道教委の告辞はやめる、祝電の披露は掲示で済ませ、祝辞は形式的なものではなく内容のあるものを要請する、式歌のうち「仰げば尊し」は歌わない、ほたるの光の他に応援歌か、反戦歌か、若者の歌を唱う。これは結局、若者の歌に決まる。——ことなどである。仰げば尊しについては職員の間にも以前から、やめようという意見が出ていた。尚、このときから卒業生が学校に

ちたいという声が生徒会の中にも生まれて来た。しかし、当事者である生徒にも少くとも校内における態度には微妙な変化がみられて来たことが報告されるようになった。一般の生徒のなかにも「三人のやり方は良くないが、言っていることは分かる」「学校側は一方的に生徒が悪いと言っている」など、はつきりした「声」がきかれるようになり、卒直な関心を表に出すようになって来た。

この集會が事態の取捨にとつて大きな意味をもったことは否定出来ない。百歩ゆずってそれは結果論だとしても、教師と生徒集會が事態取捨の道をしんげんに模索し、ここまでこぎつけたものである。ところが、この集會の二日前から、校長は出張のため不在であった。集會をひらくことにふみ切ったとき、職會で「集會当日はぜひ帰ってきてほしい」と要望したが、「どうしても会議のため帰れない」という返事だったという。これには多くの先生が怒りをあらわにした。

学校側としては、次回の集會對しては、必要なら開くことを認めるという前提で各クラスにおいて今回の集會についての反省、感想、集會で出された質問をどういう方法で知りたいかなどの意見を集約することにとつとめた。調査委員会はひきつづき調査をすすめることになった。

一方、指導課では、八月二十一日に開する調査委員会の資料に基づく問題点の整理をおこない、そのなかで、「事件以前の諸問題」「事件の翌日以後の諸問題」をあげ、教師・生徒双方にいくつかの問題があることを指摘し、「今後の指導上の問題点」「反省事項」を具体的に列挙して、九月三十日の職會の討議資料として提示した。そして処罰問題については、八月二十一日に積極的に行動した者および翌二十二日に授業を放棄した者については今後かかる行動をとるべきではないことをHR担任を通じ警告する」として、窃盗のようなハレンチな行動の処罰と異なり、生徒の思想的問題からくるこの種の処罰は慎重を要す。過去においてこのような生徒の考え、行動にたいし、全職員が十分な指導をしてきたかどうか、もしも不十分であれば今回だけの言動でただちに処分云々は不適當である」という見解を示した。

校内では、演劇部がさらに公開部会を要求し、集會對する部としての態度を話し合おうとするが、公開部会は認めないとする顧問と折り合わなかった。しかし一方では顧問と部員との間で話し合いがつかない場合、文書(ア

記念品をのこすことも中止された。この「改善」を検討しているなかで、三年学年會から、答辞は読まない」と報告され、「運営委員会」でもはじめは答辞を削除していたが、ひきつづき学年での検討を希望した結果、答辞に見合うものを作るということになり、卒業式前日の九日、代表者三人で原案を作成し、十日(卒業式当日)の朝、各クラス(三年)の代表がそれをきいて仕上げる。読むのは、例年のとおり前生徒会会長ということが決まり、ぎりぎりのところで、送辞・答辞が出揃うことになりホッとした。卒業式に対しては、一部には「反対のために出席する」とか、式後討論集會をひらくべきなどがあったり、生徒会の中にも生徒の意識をたかめるためのものにしよという考えもあったようだが、結局は不十分なながらも直前まで改善の話し合いがすすめられ、かなり簡素化されたこともあり、一応平穏のうちに卒業式をむかえることが出来たのは幸いであった。

しかし、三月一〇日(卒業式当日)付発行の「湖陵タイムス」は、この一年間の問題を総ざらいしたかたちで、顧問制、検閲問題、調査委員会、高文連、そして卒業式をかなりはげしい口調で批判している。ともあれこの年は、苦難の一語につきる年であった。少し大げさに言えば、「湖陵を震撼させた一年」であったといえよう。しかしそのなかで、教師も生徒も実に多くのことを学び、学ばされた筈である。

## 昭和四十五年

——一九七〇年——

### 複数(二人)教頭制に

万博(Expo70)の年。「よど」号乗っ取り、ハイジャック第一号。つづいてシージャック。昭和の腹切り、三島事件。ウーマン・リブ、も旗上げ。

この年道教委は、大規模校に教頭二人ずつ発令した。本校では安井友博(現校長)・和田一明が教頭として赴任した。二人教頭制の任務分担がどうなるのかはじめてのことであり興味深く見守っていたが、教務担当、生徒指導担当というかたちで、それぞれの分野を担った。しかし教職員のなかでもいろいろ



ろとまどいが多く、校務の相談についてもどちらの教頭がよいのかなどの混乱がしばらくつづいた。以降つねに、教頭は二人必要かという疑問が教職員の間でくすぶりつづけた。

六月九日(月)意見発表会<sup>1</sup>がもたれている。これは「学園紛争」にかかわる二度目の集会で、まだ生徒間にくすぶっていた学校に対する意見を公に発表させることで不満の解決をはかったもので、生徒指導部が中心となって企画されたが、設けられた場では意見を発表する生徒も二、三であり、またこれを聞く生徒も一教室を満たすにいたらないものであった。

つづいて七月十六日(木)特設ロングホームルームをもち「調査委員会」の最終報告が、生徒全員へプリントによって配布され、さらに学校放送を通じて、委員長赤坂教諭が補足説明をし、二ヶ年にわたってくすぶりつづけた学園紛争に事実上收拾がつけられた。これは前年度の中間報告(九月四日)をふまえてさらに疑義をただし整理したものであり、長期間にわたり、多数の関係者の聞きとり、資料の公平な分析をつみかさねた成果に、今後の生徒指導についての改善すべき問題点を指摘したものであった。この報告を最後に調査委員会は八月三十一日その任務を終えたとして解散した。

高校野球北北海道大会に出場した野球部は、遠軽高校と対戦、延長十七回までもつれこんだが、惜しくも一対〇で敗れた。この好ゲームは久しぶりに湖陵生の血をわかせたものであった。

## 昭和四十六年

——一九七一年——

### 宿泊研修はじまる

従来までの修学旅行が、道教委の方針で、一年次に宿泊研修、二年次に見学旅行という二本立てになった。特に宿泊研修については、はじめての試みであり、そのための場所の選定に頭を痛めた。初年度のこの年から三年間はず中幌呂の学校キャンプ場でテントを張って実施されたが、四百数十名という

相 ドル・ショック。「円」変動相場制に移行。円本ブームおこる。  
世 脱サラ、が流行。  
過激派による、歳暮爆弾、ツリ爆弾事件おこる。

であったシューズロッカーも、現在では教科書を入れる場所となり、教科書を持って帰らない、勉強しない(?)湖陵生を生み出す遠因をつくろうとは、予想できないことであった。

## 昭和四十八年

——一九七三年——

### 必修クラブ始まる

前年昭和四十七年四月一日発令の第十五代田中保校長は一年十日間の在任で道教育庁振興部長として転出した。現在までの二十代の校長中最も短かい任期であった。五月一日加藤重雄校長の発令まで、安井教頭(現校長)が校長事務取扱いをつとめた。

五月二十六日から、高校野球地区大会の当番業務にあたっていたが、季節はずれの集団性流行感冒が蔓延し、二十八日(月)二十九日(火)を臨時休校とし、野球大会当番業務は全職員で行なった。まれに見るアクシデントではあったが、生徒の健康を配慮しての措置であった。新カリキュラム実施にあたっての最も特徴的なところは、必修クラブ活動としての一単位をこの年の入学生から課したことである。場所がない金がないという無理を承知の上で「個性的な趣味、教養生活の育成、余暇の合理的な利用・民主的な人間関係」などの目標を實踐してゆこうとしたものである。そのための長い準備がカリキュラム委員会で行なわれ、職会で議論されてきた。しかしこれについて当分の間はその廃止も含めて多くの問題が指摘された。ちなみに初年度は次のようなクラブが設置された。

バスケット、ハンドボール、バドミントン、テニス、体操、柔道、卓球、剣道、バレエ、科学、家政、音楽、美術、書道、英会話、囲碁、将棋など。しかしなかには形式的にかたちをととのえただけで内容にとばしいものがあると指摘されたクラブのあったことも否定できない。

生徒数や、衛生上の問題も数多く指摘され、四十九年からは弟子屈町イナセランドに変更され現在に至っている。見学旅行は五泊六日の日程に短縮された。

美術部が、高文連の大会、学校祭への参加だけでなく、日ごろの活動を市民へアピールするために校外展を華々しくはじめたのもこのころである。オリエンタルデパートを会場にして四日間開催している。これが毎年の行事として加わった。

## 昭和四十七年

——一九七二年——

### 六〇周年記念式典挙行

五月十五日、全国あげて沖繩復帰記念式典祝賀行事が行われたが、本校も市内高校と足並みをそろえて、授業を午前中で打ち切るということで行事への姿勢を示した。

湖陵高校開校六〇周年記念式典は、九月十日、本校体育館において挙行され、同日午後四時からは釧路商工会館で祝賀会がもたれた。釧路市内はもちろんのこと全国の各界で活躍している先輩がつくった歴史と伝統の重みをうかがわせるに十分なものであった。特に式典では「歩み」をスライドとしてまとめて映写したことは参会者に大きな感慨をもよおさせたものとして好評であった。

生徒会機関誌である「湖陵」が創立六十周年記念特集のサブタイトルで発刊されている。同窓生名簿にまじって、「湖陵通信」として小さな写真入りコラムが十四コマほど特集されているのはかわいらしい。

同窓会が、シューズロッカーを記念事業の一つとして学校に寄贈した。それまで旧態依然として大きな皮カバンと靴袋を持って歩き、それこそが湖陵生独自の風俗であったのだが、在校生一人一人が自分のロッカーを所有できたことは学校生活の大きな変革であった。ところが同窓会の美しいご厚意

相 連合赤軍による全国を震撼させた、あさま山荘事件。「総括」という名の死の儀式。  
世 冬季オリンピック札幌大会、国中バンドで大騒ぎ。日本列島改造論で地価暴騰。ボルノブーム。

## 昭和四十九年

——一九七四年——

### 生徒会費値上げ

生徒会主催による討論会は、「1制服の自由化について考える。2高校生の非行と社会環境について考える。3男女交際とその許される範囲」という議題で開催されている。何年かを周期としてくり返される古くても、生徒にとっては新しい議題なのであろう。会議のルールにのっとった健全な生徒会活動の一環をうかがわせている。

また生徒会費が、昭和四十四年から一七〇円のままであったのだが、物価高騰のあおりで、二八〇円に値上げを要求し生徒総会で承認された。その総会提案の資料などもいねいで納得させる手続きをふんでいた。

すでに交通事故は生徒の通学生活をおびやかすものであったが、生徒指導部から釧路公安委員会に信号機設置の請願がなされた。学校正門前と、富士屋商店前二ヶ所であったが、学校正門前についてそれが実現されるまで数年をまたねばならなかった。富士屋商店前は、いまだ実現されていない。

相 転じて、節約は美德、物価上昇とどまるところを知らず。横井さん、生活評論家となる。爆弾作りの教科書「腹腹時計」押収される。  
世 ヨットで世界一周世界記録(堀江謙一)。超能力ブームおこる。

## 昭和五十年

——一九七五年——

### 「一高」紛争の余波

同好会発足の特徴的なものとして「メルヘン・アート」がある。「童話・人形劇を通して情操を高め夢を育てる」という設立主旨は、TV劇画の影響のあらわれとして、時代の反映が見られ印象ぶかい。見学旅行は、出発予定の日時が国鉄ストのため二転三転と変更を余儀なく

相 不況深刻化。失業者一〇〇万人突破。ん、の不況(あながない)紅茶キノコ爆発的ブーム。  
世 沖繩海洋博。天皇、広島島の原爆を「気の毒だが止むを得ない」と。およげないやきくん大ヒット

され引卒教師、生徒の混乱もひとしおでずいぶん悩まされた。結局十二月七日に第一班が発見したわけであるが釧路では考えられない時期であった。しかし京阪は意外によい気候に恵まれ、他校の見学旅行団も殆んどなくてさわやかな旅行を楽しめたという。

十二月二十四日逝去した長尾四方一君は、病状の回復が望むべくもないにもかかわらず、本人の学習意欲は旺盛であった。非常に変則的なことながら、担任を中心に特別学習指導計画を立て、各教科担任が白糠町の自宅におもむいた。彼は危篤に近い状態でありながら、この補充授業を心からよろこんでいたという。

希望学園釧路第一高校では、校長に対する暴力事件が発生し（昭和五十年三月十九日）、いわゆるそれまでの労使紛争が一挙に火を吹き出し、五十一年度の生徒募集停止が表明された。その余波として市内各高校が間口増となり、本校も普通科一間口が増えた。釧路第一高校労使紛争がもたらした落し子であった。

## 昭和五十一年

一九七六年

### クラスの呼称変わる

相 景気相変わらず停滞気味。サラリマンのサイドビジネス話題となる。(兼サラ)。五つ子テレビの話題をさらう。「ピーナッツ」「ピーシーズ」「ユニット」「灰色高官」ニュースを独占。ロッキード事件明るみに。

この年から普通科が一間口増となり、クラスの呼称も従来の「ABC」から新しく「123」と変わり、一年生は十字級となった。学級数はふえたものの、教室の数が今までのままであり、教室の増築が急がれ、また授業の展開（体育など）の仕方も大変な状況になり、必ずしも、大きいことはいいこと、では、の感を強くした。

夏休み明けすぐに校舎等の改築工事が始まった。主なものをあげると、C棟男子便所（二階建）を増築し、旧男子便所をとりこわし、その跡に三教室を増築、校舎内消火栓のとり付け、屋内体育館床の改修工事、富士見公宅の新築（二棟十二戸建）などであった。この中で、三教室の増築について、「ど

## 昭和五十三年

一九七八年

### 三十学級のマンモス校に

相 成田空港開港。減量経営で「まだら景気」とか。「サラ金地獄」流行語というにはあまりにも悲惨。家庭内暴力、窓ざわ族、不確実性の時代等々。嫌煙権も話題に。

昭和五十一年から始まった普通科一クラス増は今年で完成し、全学年十学級の合計三十学級となった（定員数千三百三十五名）。今年度から校内研修の実践強化として研究紀要の発刊、校内研修会の開催が始められた。又五十四年一月に実施される大学入試共通一次試験の願書受けが十月より開始され、三年のクラス担任は何度かの打合せを行い対応していった。これによりこれまで長い間続いていた国立大学の一期校・二期校制が一本化され新しい入試制度へと移行していった。マークシート方式、データリサーチ等の言葉が身近かに使われるようになった。

## 昭和五十四年

一九七九年

### 共通一次スタート

相 インベーター、日本侵略、爆発的ブーム。外食産業急成長。「日本人はウサギ小屋に住む働き気がいい」とEC。中高校生気質は「三主義（学バス、遊バス、働カズ）」と教研集会。「明白宣言」大ヒット「天中殺入門」ベストセラーに。「激……」「エガワル」流行。

共通一次試験が初めて実施され、多少の戸惑いもあったが、例年のように無事合格した生徒は担任に報告に来て喜びを分かち合っていた。此の年は野球の当番校業務があり、天候を気にしながらの大会期間であった。雨が降って球場に水がたまる、生徒と教員全員長靴のスタイルでバケツリレーの水はけ、スポンジを使っての水の吸いあげ等、大変な作業であった。又秋に行われる校内マラソン大会は、当日朝からの降雨により中止となった。必修クラブは毎年、活動場所、施設設備、予算等の不十分さなどで議論になっているが、より充実した活動(?)を行なうということで改訂案が出

うして、総二階にして四教室にできなかったのだろう。そうすれば視聴覚室や生徒の面談室など、もっと余裕をもってとれたのに……」という声が少なかった。やっぱり、「先だつものが……」ということか。

又、来年度の教育課程についても若干の変更がカリキュラム委員会から出され、国語古典を一年一単位増、二年一単位減、英語一年一単位減、二年一単位増（いずれも普通科）が了承された。三学期の始業式の日、我が湖陵の大先輩である山本平吉氏より屋体ステージの舞台幕の贈呈式が行われ、殺風景だったステージがどっしりと、見栄えのする舞台にかわった。そしてそのステージで、卒業式前日の三月九日、今も行われなくなってしまった予餞会が行われ、三年生は思い出多い湖陵を去っていった。

## 昭和五十二年

一九七七年

### マラソンコース変わる

相 不況長いトンネルへ。トンネル不況。カラオケ、ブーム、騒音公害まきちらす。落ちこぼれ、乱塾時代とも。教育を蝕む。三ト、ヤリ玉に。王選手国民栄誉賞第一号に。猫も杓子もジョギング。

学級数も二十九学級となり、昨年度増築された教室も使用され始めた。この教室と古い教室との冬の室温はいつも五〜六度も違い、いかに古い教室が寒いかが改めて知らされた。例年行われている団体鑑賞は今年屋体を舞台とした「走れモロス」であった。いつもと違った舞台配置で生徒も演劇のすばらしさを存分に味わう事が出来た。又此の年は卒業記念レコードを作成、校歌、応援歌が収録された。長い伝統のある校内マラソンのコースが市内のコースから湿原マラソンのコースに変わったのもこの年からである。

来年度から実施される大学入学共通一次試験の試行テストが十二月二十四日教育大学釧路分校を会場に実施された。受験生の負担を軽減するという理由で行われる訳であるが、はたしてそうであるかどうか議論の分れるところである様に思われる。

なお昭和五十八年に予定されている七十周年記念行事についての打ち合わせ会議が始まったのはこの年の第三学期に入ってからである。

## 昭和五十五年

一九八〇年

### キャンプ、オンネットーで

相 実質資金初のマイナス。風呂敷包みの一億円事件。「カラスの勝手」それなりに流行。ドラエモンの人気上昇。参加しないことに意義がある？モスクワ五輪。

夏の高校野球北海道大会が本校を当番として七月十六日より市営球場を会場に行われ、旭川大学高校が優勝、幸いにして予定通りの日程で消化できた。夏休み恒例の学校キャンプは中幌呂の学校キャンプ場が河川工事のため使用できず、阿寒のオンネットーで一五七名の参加で実施された。

## 昭和五十六年

一九八一年

### マラソンで悲しい事故

相 「ゼロサム社会論注目あびる。校内暴力多発。通り魔殺人、動機なき殺人、無差別殺人のかけにひそむ覚せい剤。ノーパン喫茶、ビニ本流行。幻の名古屋オリンピック。ハチのひと刺し。ぶりっ子。うける。

此の年は、器楽部が地区大会A編成で金賞を受賞し七年ぶりに全道大会へ出場、又合唱部が秋田で行われた全国大会へ初出場など輝かしい実績を残した半面、本校にとって悲しく忘れることの出来ない事故が発生した。校内マラソン大会に於ける一年五組石川千晶さんの死である。大会当日、快晴の河畔公園のマラソンコースに集合、担任より諸注意等をうけ出発、元気に折り

返し点を通過したが、ゴール寸前で倒れ、すぐ救急車で運ばれたが手当の効なく心不全で逝去、実に残念な出来事であった。葬儀にはクラス、クラブの生徒、教職員等多数が参列し故人の冥福を祈った。その後、御両親より本人の愛読書など、又「短かい期間であったが大変お世話になりました」と二度に亘ってお金が寄せられた。そしてこの御厚意に基づいて図書館の一面に「ちあき文庫」がつくられた。その文庫棚の前には次のように書かれてある。「この文庫は、昭和五十六年九月二十六日に行われた校内マラソン大会で、ゴールを目前にして倒れ、亡くなられた石川千晶さん（一年五組）のご遺族が、湖陵生の心身の健全な発達を願って寄せられたご好意をもとにつくられたものです。」

年が明け二月に入ってから、三月に実施される入学者選抜試験に先立って理科の推薦入学の面接試験が行われた。今年が第一回目であった。又入試科目の配点は六十点満点の合計三百点、日程は従来の二日間から一日となった。今年の受験生は、いわゆる「ひのえ午」という事で例年より少なく、第二次募集を行なった高校も少なく、本校もその例外ではなかった。なお来年度からの入学生から新教育課程に移行するのである。

## 昭和五十七年

一九八二年

### 「改築促進期成会」発足

実質収入連続ダウン。東北、上越新幹線開業。中国孤児問題に暗雲、戦後は続く。豪雨、台風、地震、噴火、墜落、ホテル火災と惨事続く。百万人の反核大会（ニューヨーク）。ルンペン、ネクラ流行。

八月の同窓会総会で、同窓会が七十周年記念のメイン事業として考えていた「同窓会館」の建設計画が決定した。それによると会館は鉄筋コンクリート造り、建築面積約六百六十平方メートルの建物で、内部には三、四百人収容の講堂や部室、シャワー室、それに同窓会事務局が整備され、在校生とOBが共同利用する。場所は北海道新聞社が以前道教委に寄贈した学校横の約千平方メートルの用地が予定されているが、建設予定地については校舎全面改築の運動がはじまったこともあり、この計画とのからみで尚流動的なもの

選択制で同じ河畔マラソンコースで実施された。（十月六日）

今年度入学生ホームルーム編成についてのカリキュラム委員会からの提案がなされ、「大幅な選択制を活かすために進路指導を強化し、選択科目の学習内容を十分理解される必要がある」とあり、科目選択の最終決定を二年時に行えるようにする「可能な限り質的に均一なHR編成であること」ということで、「今年度入学者については毎学年編成替えをし、次年以降については継続して審議するものとする」ことになった。

創中三十三期・湖陵二期同期会会報「笹ノ兎」二号が発行され（十一月）、「学徒動員懐旧特集」西春別の巻（長内宏さん）や、戦後初めて、校友会に「映画研究部を誕生させた頃の思い出」と題して、浅里芳直さん（二十五年三月卒業）が、本校・創女高（現江南高校の前身）、工業三校の合同名画鑑賞会を開催したこと、「道新主催の映画「青い山脈」今井正監督、池部良、杉葉子主演」の座談会に高校生の代表として出席した思い出を語っている。戦前・戦後の激動期に青春をすごした先輩たちの生き生きとした息吹が感じられる。

## あとがき

「小史」は、はじめ昭和三十八年から五十七年まで二十年間の学校の歴史を、「学校経営」「教育実践」「生徒の活動」（仮題ではあった）という柱でまとめたいというのが最初の案であったが、時間的な制約もありとてもまとめきれないので、年ごとにその一年間の主な出来事、問題をえらび、それらについての経緯をまとめるかたちに変更した。

その方針にもとづいて、学校日誌に目をとおり、学校の歴史を語るうえで必要な出来事・問題をとりあげたつもりであるが、三人（赤坂、永田、伊藤）で分担したため、記述の点で多少のアンバランスが見られる点はご容赦願いたい。全体を通して統一的な記述にするための調整に時間的余裕がなかったことをお詫びする。

ところで、この「小史」で果たして湖陵二十年間の「歴史」を充分に記録することが出来たかどうか、残念ながら確たる自信はない。実はもっと生々

があると思われる。会館の設計は、東京在住の本校卒業で新進気鋭の建築家毛綱毅曠さんで、毛綱さんは、ラセン形の外観をした釧路市立郷土博物館や、東中の新しい校舎の設計も担当して話題を呼んだ建築家。会館の設計もこれまで同種の建造物のイメージを破るさん新たなデザインで反響を呼んでいる。（完成予想図参照）総工費は一億八千万円が見込まれている。

尚、この「同窓会館」については何回か学校との間で話し合いがすすめられたが、そのなかで、当時の中村校長が持ち前の器用さを発揮して自ら模型をつくり、それを校内の「推進委員会」で披露、先生方の意見をききながら一応の設計図まで作るという意欲をみせたが、これは結局「幻の会館」に終わった。

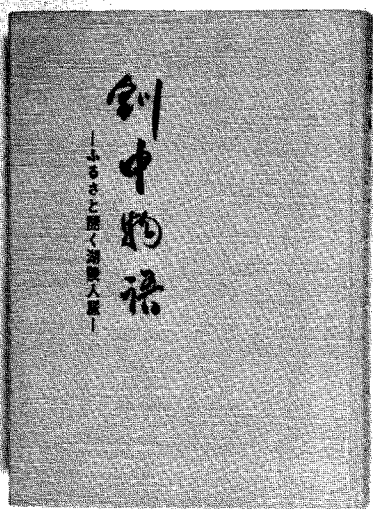
また、老朽化し狭くなった校舎を一日も早く建て替えてほしいという声がこの数年来学内からも出て来ていたが、七月、湖陵高校の全面的改築を強力にすすめるため、釧路市をはじめ、教育関係者、PTA、同窓生などからなる「改築促進期成会」が発足した。（九日）（会長・鰐淵釧路市長、副会長・梅山市教育長、村上PTA会長、伊藤後援会長、組村同窓会長、成田定時制PTA会長）

八月二十日、第一回の道教委への陳情がおこなわれ、「湖陵高校は半分が鉄筋ということで計画がはかばかしく何とかなければ緊急の都合がよくわかる。全体計画にかかわらず何とかしなければならぬ」と考えている」という教育長の回答を得て、「やや、先が見える」ようになって来たと同関係者は見ている。

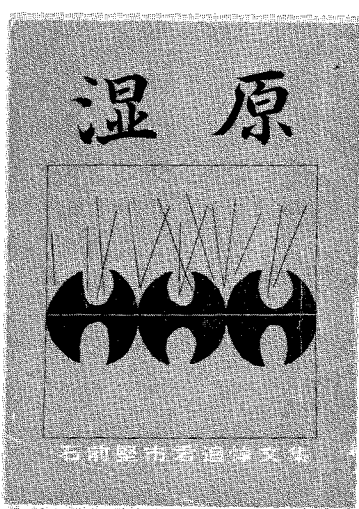
この四月、留萌高校から転動して来られた遠藤智貴先生（理科・二十七才）は夏休み前から体調をくずし、三ヶ月余の闘病生活のあと、十月二十二日、故郷の新潟県燕市で逝去された。本校勤務は、わずか四ヶ月であったが、一年生の副担任として生徒からも好かれ、宿泊研修等でも親身になって生徒の面倒を見ていた姿が思い出され、誠に残念で悲しい出来事であった。葬儀を済ませたあと、御両親が来創され、ご本人の蔵書を学校（図書館）と生物科に寄贈された。それを見ると専門の理科の分野は勿論のこと、理学、心理学、クルマ等、多岐にわたっており先生の学問的深さと趣味の広さを偲ばせている。心からご冥福を祈る。

昨年のマラソン大会のしんげん反省に立ってこの年は男女とも、コースしいものがあつたような気がするからである。「記念誌」という出版物の性格上あえてふれなかつたところに、それがあつたような気がする。しかし、それは何時の日か、また別のかたちで残すべきだと思ふ。

三人の分担は次のとおりである。昭和三十八年から四十四年まで（赤坂）昭和四十五年から五十年まで（永田）、昭和五十一年から五十七年まで（伊藤）



くまざさの匂い「創中物語」  
釧路新聞社が発行、ふるさと拓いた  
「湖陵人脈」(52年 8月)



3年H組友人一同が出した  
石前堅市君追悼文集  
(1966.1.21)